

志摩・今浦の隠居制覚書

高 橋 統 一

1. いまは隠居制はどうなっているか

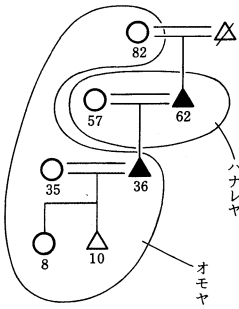
私と清水浩昭（東洋大・大学院非常勤講師，同アジア・アフリカ文化研究所研究員，厚生省人口問題研究所・人口動向研究部長）は，1989～91年に大学院学生（社会学研究科社会学専攻）5名と三重県鳥羽市浦村町今浦で，「志摩地方の社会変動と文化伝統」について社会人類学的な集中調査を行った。このテーマの視点は，明治以降の近代化の過程で生じたさまざまな社会変動に対応して，志摩の民俗社会に根を下してきた文化伝統が，どのように変容し，またどの程度，存続しているのか，そしてそれらには，どういう条件や理由が考えられるのか，というものである。この場合，変化の度合いや速さは，明治，大正から少くとも昭和の戦前，そしておそらく戦後の昭和30年代までは比較的穏やかであったが，その後の高度経済成長期以降では，志摩地方も他の民族社会と同様に，かなり速く激しいとしてよいであろう。また，志摩の文化伝統として具体的に何をとりあげるか，について私たちは，まず農・漁業の生業構造，次に社会の基本構造に関わる家族とりわけ隠居制，及び年齢集団ないし年齢階梯制に結びつく通過儀礼，そして宗教構造に関わるものとして葬送儀礼と両墓制，及び神社祭祀とくに双分制，などを考察することにしたわけである。

この共同調査の成果は，このほど別稿にまとめることができたが〔高橋ほか 1992〕，ここではそれとは別に，この調査で得られた多くの資料・情報の中から，とくに隠居制に関するものについて，私なりの若干の考察を提示してみたいと思う。というのは，後述の如く，志摩の隠

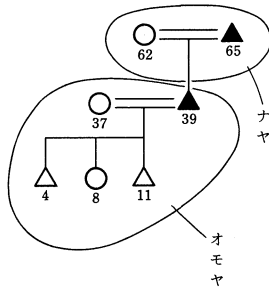
居制に関しては，これまでいろいろ論議されてきているからである。実は上掲の共同報告論文でも，とくに金美栄がⅢ章で隠居制をめぐるいくつかの問題点を分析しており〔金 1992〕，私自身も序章と終章で隠居制への多少の意見を述べておいたのだが，もちろん本稿はそれらを踏まえてのもの，ということになる。

今浦は紀伊半島の東端，伊勢湾沿いのリアス式の奥まった入江，麻生ノ浦に面した半農半漁（農が主）の集落で，平成2年（1990）2月末の住民基本台帳では，人口483人（男242，女241），110世帯である。ところが，今浦集落の事務所（集落及びこの事務所を「地下」という）では，今浦は110世帯ではなく，96世帯だとしている。即ち住民票では110世帯なのだが，地下としては96世帯とみなしているのである。この14という数のズレは何によるかと云うと，住民票にはあるものの他出して今浦には居ない4世帯，住民票にはないが実際は今浦に住んでいる2世帯，これらを相殺して差引いた12世帯分を，地下では勘定に入れていないためなのである。つまり，この12世帯はそれぞれ別の1世帯に含まれる，あるいはそれらと一緒に一つの世帯を構成するもの，と考えられているわけである。例えば，親夫婦の世帯と息子夫婦の世帯が，住民票上，別々になっていても，地下としては一つの世帯とみなしている，という具合で，その場合の居住＝生活形態にはさまざまな変差があるのだが，とにかく1世帯（1戸）あつかいなのである。このことは，云うまでもなく，隠居制とも関わる重要な問題を含んでおり，十分に検討に値することと思われるので，

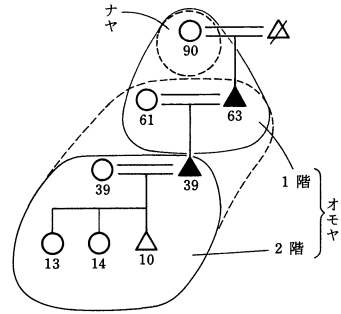
事例①



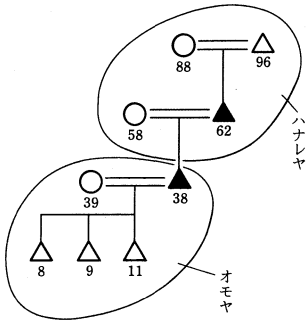
事例②



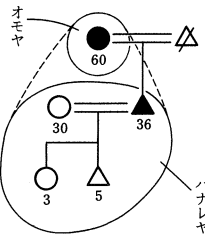
事例③



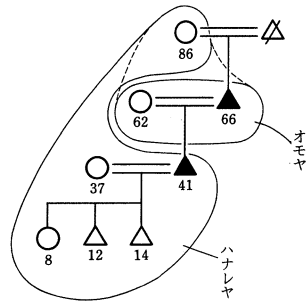
事例④



事例⑤



事例⑥



(△は男, ○は女, ▲, ●は住民票上の世帯主, 数字は年令。
③, ⑤, ⑥では, 実線で囲んだのが住民票上の世帯構成員で,
点線が実際の世帯構成員。)

以下, 若干の考察を加えてみたい。

さて, 上述の12事例のうちから6つの場合を取りあげて具体的に検討してみよう。図の事例①～③は, 同じ屋敷地内に母屋(オモヤ)と納屋(ナヤ)ないし離れ屋(ハナレヤ)があって, 親夫婦と息子夫婦が別々に住み分けている場合であり, 事例④～⑥は互いに離れた別の屋敷地にオモヤとハナレヤがあって, 親夫婦と息子夫婦が居住を別にしてしている場合である。今浦において, この親世代・子世代間の別居におけるナヤ及びハナレヤという呼び方は, 次のように使い分けられている。即ち, ナヤは既存の納屋を人が居住できるように改造したもので, 一つまたは二つの部屋が設けられており, これに対してハナレヤは始めから, 居住用に建てら

れ, したがって, きちんとした住宅の形をとっている。なお, 同じ建物で親夫婦と息子夫婦が住み分ける場合は, 親世代が1階を, 子世代が2階を使うというのが一般的なルールのようなのである。

事例①は, 長男夫婦がオモヤに, 親夫婦がハナレヤに, という具合に住み分けているが, 家業は民宿で, これは親子が共同で経営しており, 経営の実権は62歳の父親にあるようだ。したがって, 息子にオモヤを譲ったという点では, 形式的には隠居したようにもとれるが, きちんとしたハナレヤを建てて住みながら, 家業の実権を手離していないようなので, 隠居というにはまだ少し早い。もちろん, いずれは隠居ということになるだろうが, 現在は82歳の彼の母が孫夫婦とオモヤに住んでおり, これが実質的

な隠居である。なお、この二世帯をひとつにした地下における代表者は35歳の長男であって、地下の会合などムラの公事には、すべて長男が出席する。

事例②は、長男夫婦がオモヤに、親夫婦がナヤに、それぞれ居住し、65歳の父は農業だが、39歳の息子は消防士で鳥羽市中心部へ通勤している。これも息子にオモヤを譲り、父がナヤに移っているで形の上では、たしかに隠居であり、また、地下での代表者も長男になっている。しかし、父子の職業が違い、息子は都会へ勤めに出、父が代々の家業である農業にいまも携わっているという状況では、果して隠居というような意識があるのかどうかいささか疑問である。

事例③も、息子夫婦にオモヤを譲り、親夫婦がナヤに住むケースだが、実際にはナヤに90歳の祖母が1人で住み、63歳の親夫婦がオモヤの1階に、39歳の息子夫婦がその2階に、という具合に住み分けている。そして、この場合も、63歳の父が農業、39歳の息子は通勤の会社員であって、前出の①、②の事例と考え合わせると、63歳の父には隠居意識がうすく、したがって、90歳の祖母が実質的な隠居ということになるのかもしれない。この祖母の食事の世話などは、孫息子の嫁がしている。なお、この場合も地下での代表者は息子である。

以上は同一屋敷地内の別棟における親子二世代の分住であるが、次に別々の屋敷地に住み分けている場合について検討してみよう。

事例④は、62歳の父が38歳の長男にオモヤを譲り、自分は少し離れた別の屋敷地にハナレヤを建てて、そこに96歳の祖父と住むもので、三世代の三組の夫婦が、祖父と父の二世帯に孫世代という形で分住しているわけである。ここは農業と共に漁業でもカキ養殖をやっており、かなり富裕である。カキ養殖は主に父が経営し、名義も父のものであるのに対し、息子は税理士で勤めに出ている。そして息子の嫁も共働きで外に出ているから、農業も父夫婦の管轄ということになる。祖父夫婦はともにたいへん高

齢なので、その世話は58歳の母が主にしているが、息子の嫁も一部を分担している——食事はオモヤとハナレヤで別々にしていたのだが、この頃は一緒にするようになり、朝食は息子の嫁が、夕食は母が調理する。なお、地下での代表者は、この場合も息子である。この事例も父が息子にオモヤを譲っているで、形の上では隠居だが、実質的な隠居は祖父ということになるだろう。

事例⑤は、60歳の母がオモヤに、36歳の息子夫婦が50mほど離れた別の屋敷地のハナレヤに、それぞれ分住している。ただし、昨年、父が死亡するまではそのように住み分けていたのだが、いまは母が淋しがるので、息子夫婦がオモヤへ移って一緒に生活している。

だから息子夫婦の家財道具も、いまのところオモヤに移してあるのだが、母の気持ちが落ち着いてきたら、いずれハナレヤに戻ってくるつもりである、という。この息子はカキ養殖を経営し、また自動車整備の仕事もしている。そして、父が死亡するまではカキ養殖を父がやり、息子は主に自動車整備をやっていたようである。したがって、父が隠居したかにみうけられることもなくはないが、オモヤに住みつづけていたのは、やはり隠居ではなかった、という方が当たっていよう。もちろん、現在は母が実質的に隠居である。地下での代表者は、この場合も息子である。

事例⑥は、66歳の父夫婦がオモヤに住み、41歳の長男夫婦が86歳の祖母と、今浦集落の中心部から300mほど離れた板敷団地¹⁾のハナレヤに住んでいる。だが、それは住民票上そうになっているだけで、実際には祖母はハナレヤでなくオモヤに住んでいる。父は農業とともにカキ養殖をやり、息子は消防士で勤めに出ている。地下での代表者は、こども息子である。この事例も、父が隠居したともうけとられなくはないが、やはり、そうではなくて、実質的な隠居は祖母だけ、ということになるだろう。

以上の諸事例におけるナヤとハナレヤの区別

は上述の通りなのだが、別居に当って実際に、ナヤになるかハナレヤになるかは、そのイエの事情が左右するであろう——同一屋敷地ならその面積の広狭、また別の屋敷地でもオモヤとの距離、また家族員数やその世帯構成など。いずれにしろ、この区別にさほど決定的なものではなさそうである。そこで、具体的な生活条件として、親と子の生業（職業）の異同が、やはり重要な意味をもっているように思われる。即ち、親子の生業が同じなのは民宿を共同経営の①だけで、他はすべて父が伝統的な農業ないしカキ養殖漁業をやり、息子は外へ勤めに出る（⑤も父の生前は然り）という形が、どうもいまでは一般的になってきているようだ。高度経済成長による職業の多様化が子世代に浸透し、そのことが親子の別居にも微妙に反映して、親は一応、隠居した形をとりながら、伝統的生業とつよく結びつき実質的な隠居にはならない、という状況がある。また、事例①、③、④、⑥で親を隠居とみなすとすれば、祖父母はいわば大隠居になるわけだが、現実には上述の如く、祖父母だけが実質的に隠居であるのも、この点から肯けるのである。なお、今浦では昔から三世代の三組の夫婦がある場合、「ミフウフが一緒にいるのは良くない」とされ、祖父母はナヤに、そして親夫婦と子夫婦も1階と2階に住み分けたというから、上述の異世代夫婦の別居志向も、核家族化に伴う近代的なものではなく、やはり隠居制に結びつくものと理解すべきであろう。

もうひとつ注目されるのは、どの事例でも地下における代表者が親ではなく子であることで、この点では、父は長男にムラでのイエの代表権（家長権）を譲っていることになるから、いわば「ムラ隠居」である。したがって、上述の諸事例では、まだ「イエ隠居」は実質的にしてはいないのに「ムラ隠居」している、とも云えるわけである。そこで「イエ隠居」すれば自動的に「ムラ隠居」になるのが本来の形であるとすれば、今浦の現在の状況はどのように解釈されるのか。それとも、「イエ隠居」と「ムラ隠

居」は本来、別のレベルの事柄で、必ずしも結びつかず、別個に考えなくてはいけないのか、といったことが問題になってくる。

私としては当面は、今浦の現在の状況は、前者の立場で考えた方が理解しやすいように思われる。今浦では、息子が結婚して一人前になり力をつけてきたら、父はそろそろ譲ることを考え、地下に「息子を代らさしてもらおう」と届けでるが、その大体の目安は60歳位である——60歳になると地下の公的な労役義務が免除になる。一般に伝統的な民俗社会では、60歳という年齢は実質的に「イエ隠居」して然るべき年齢であり、それは同時に「ムラ隠居」にも通じるとみなしても、それほど不都合とは思われない。²⁾ところが、前述のように、息子が伝統的生業を離れて勤人となり、家業（農・漁）は依然として父がとりしきる、という現情では、逆に、「ムラ隠居」しても「イエ隠居」にはなっていない、ということになるのではなからうか。³⁾

2. かつて隠居制はどうなっていたか

今浦の地下に『昭和九年十二月改 戸籍簿 今浦区会所』と表記した戸籍簿が保管されている。これは明治初年から昭和20年代はじめまでの戸籍事項が、家並び順の各戸ごとに記載されていて、おそらく「壬申戸籍」作成当時のものが含まれており、たいへん貴重なものである。なぜ、これが地下に保管されているのか不詳だが、多分、かつての鏡浦村（今浦、本浦、石鏡の三集落からなる鳥羽市編入までの、行政村）において、今浦区の地下（会所）では戸籍事務を行っていたのではないかと、思われる。それはさておき、私は幸にもこれを閲覧する機会を得ることができたので、この戸籍簿の隠居に関わる部分について若干の考察を加え、かつての隠居制の一端を窺ってみたいと思う。

これには全部で119戸分の戸籍事項が載っているが、○年○月○日、前戸主○○隠居により家督相続届出、といった記載が明治4年（1871）から昭和10年（1935）までの65年間に48例みられる。この48例の中には、同じイエで2

度、隠居がなされているのが13戸あるので、これを勘案すると、119戸の約3分ノ1で、隠居による相続があったことになるが、いずれにしろ、かつては隠居慣行が制度的に定着していた、とみなしてもよいと思われる。なお、この119戸というのは、もちろん明治初年当時から、ずっと存在していたのではなく、その当時のものとみられる『名寄帳』では、54戸の戸主名が列記されているにすぎない。その後、大正6年(1917)の青年団のある記録によると、戸数91(このうち農が78、漁は0)となっているが、これは明治中・後期に開墾・耕地拡大が積極的に行われ——先の名寄帳では田・畑の合計が37町歩(ほとんどが田)であったのが、後者では62町歩(同様に、大部分が田)に増えている——これによって戸数が増加したのである。この大正期の戸数と耕地の規模は、今日でもほとんど変わっていない。そして119戸の中には今浦から他に転出してしまったり、廃絶したイエもあるが、この65年間に分家したイエもあって、それはこの戸籍簿でみる限りでは11例である。したがって、他出や廃絶がかなりあったものと思われるが、いずれにしろ、今浦のこのような状況の中で、個々のイエの事情に対応して、隠居が48例もあったということは、前述のように、制度としての隠居慣行が存在したことを裏書きしているとみてよいであろう。

さて、分家の11例(もちろん、今浦集落内での分家のみ)を含め、48例の隠居の事例を年代順に整理してみると、表のようになる。戸籍簿上の隠居は明治4年の事例①が最初だが、隠居者の年齢が確認できるのは明治36年の事例②からで、それ以後、昭和10年まで確認できた26例のうち、最高が72歳、最低が58歳で(70歳代はじめが4例、50歳代おわりが2例)、ほとんどが60歳代、それも60代前半が多い。したがって隠居年齢の目安は、60歳をこえたら、ということであろう。これに対して、相続者の年齢は、不明なのは2例だけで、あとの46例のうち、最高が54歳、最低が16歳(50歳代は1

	年	隠居年齢	相続年齢	相続者・分家創設者の結婚
①	明治4	?	16	未婚
②	5	?	23	?
③	"	?	22	?
④	6	?	16	未婚
⑤	8	(分家)	27	
⑥	10	?	27	未婚
⑦	12	?	20	
⑧	"	?	16	
⑨	"	(分家)	39	
⑩	16	?	16	?
⑪	"	?	21	
⑫	"	?	22	
⑬	"	?	16	未婚
⑭	"	?	18	未婚
⑮	"	?	?	
⑯	"	?	25	
⑰	20	(分家)	32	?
⑱	22	(分家)	31	?
⑲	28	?	23	
⑳	31	?	23	未婚
㉑	33	?	25	
㉒	36	63	24	未婚
㉓	37	?	24	
㉔	38	59	28	
㉕	41	(分家)	29	結婚と同時に分家(3男)
㉖	44	?	35	
㉗	"	?	23	結婚と同時に相続
㉘	大正2	64	?	
㉙	4	63	41	
㉚	5	71	54	
㉛	"	?	24	
㉜	6	58	37	
㉝	"	61	30	
㉞	7	69	38	
㉟	"	(分家)	28	結婚と同時に分家(2男)
㊱	"	62	31	
㊲	9	66	32	
㊳	"	62	38	
㊴	10	62	30	
㊵	"	65	45	
㊶	"	64	40	
㊷	11	(分家)	27	結婚と同時に分家(4男)
㊸	"	72	35	
㊹	"	63	31	
㊺	"	63	35	
㊻	13	66	35	
㊼	14	(分家)	42	
㊽	昭和2	65	40	
㊾	"	(分家)	32	
㊿	"	70	48	
㉑	"	?	42	
㉒	3	(分家)	34	(兄52)
㉓	"	62	37	
㉔	4	64	43	
㉕	5	(分家)	28	?
㉖	6	63	22	未婚
㉗	7	66	39	
㉘	8	71	44	
㉙	10	64	44	

例、10歳代は6例)、多いのは20歳代の16例と30歳代の14例で、40歳代は9例と比較的少い。このように、20歳代から30歳代にかけての年齢層に相続者が多いのは、やはり先の隠居者の年齢に相対的に見合っているからだと思われるが、時代を遡るほど相続者の年齢が若くなる傾向が窺われる。

とくに明治初期のこの傾向は、隠居者の年齢が不明なので、相続者の年齢との対応関係がつかめないのだが、16歳とか18歳のまだ年少のしかも未婚の息子(事例①、④、⑬、⑭など)に家督を譲って隠居しているのには、どういう背景があるのだろうか。

この年齢では若衆組でも、まだ兄貴分ではなく、さらに未婚では一人前(一戸前)としても不十分である、とみるのが普通と思われるのだが、何か特別な事情があったのだろうか。これらはいずれも数年後に結婚しており、この時代は一般に、かなり早婚なので、とくに問題にすることもないのかもしれないが、どうも腑に落ちない。なお、分家の事例では、年齢が20歳代後半から30歳代で、既婚または結婚と同時に分家、というのがほとんどであるから、特別な事情や背景はないとしてよいだろう。そして、全体に共通する分家の条件としては、先述の開墾・耕地拡大を指摘できるくらいで、他にこれといった事実を見出せないのだが、差違って以下のことを指摘しておきたい。

表の事例④⑤では大正11年(1922)に父が63歳で隠居し、35歳の長男に家督を譲っているが、このときに次男は27歳であった。そして長男は大正元年に25歳で、次男は大正5年に20歳で、それぞれ結婚しており、大正11年の時点では、前者には子供が2人あったが、後者には子供がまだなかった。やがて5年後の昭和2年(1927)になると、次男が32歳で分家している(事例④⑨)——この間に子供が2人生れるが、すぐに死亡。なお、次男の分家の半年後に父が亡くなっている。

この事例④⑤の隠居において、隠居した父と相

続した長男は隠居屋(ナヤカハナレヤ)と母屋(オモヤ)に分住したものと思われるが、次男はそのどちらに住んだのだろうか。

戸籍簿からこのことは判らないが、多分、次男は父と一緒に住んだのではない——彼は結婚していたが、おそらく、嫁のイエへ通っていた(訪婚)のではなかろうか。その後、次男は生後間もない子供を2人とも亡くすなどで訪婚を止めることにし、父も体が弱ってきたので、あらためて正式に分家することになった、というのが事例④⑤・④⑨についての私の推察である。この推察の当否はともかく、その背景として考えたのは、前節でみたような異世代夫婦間の別居習俗と志摩地方に一般的であった訪婚制⁴⁾及び「隠居分家」制である。

「隠居分家」とは、竹田旦によると、「数人の男子のある家において、長男以下の成人・結婚を機会に、次男以下のために完全なる分家を設定しつつ、同時に親夫婦がその分家において隠居形成を繰り返す習俗である」と説明されている。〔竹田 1969: 76〕

この隠居分家には、末子にまで徹底させる「完全隠居分家」と途中で止める「不完全隠居分家」があり、具体的には末子相続や非長子相続との関連でいろいろ変差が考えられるというが、竹田はさらに、類別上のもう一つの要点は隠居者の居所であるとし、次の4つに区別している。

単式——完全にしろ、不完全にしろ、両親が最終分家の家族員として終世を過すもの(これが最も多く、分布は長崎県五島列島・鹿児島県長島・甑島・屋久島・大隅半島・愛媛県伊予郡松前町浜・和歌山県熊野地方・三重県度会郡南島町阿曾など)

複式——両親が最終分家から再び本家たる長男家にもどるもの(長崎県五島列島・鹿児島県甑島・種子島・大隅半島・愛媛県西宇和郡三崎町与侈・同越智郡上浦町盛など)

選択式——居所を両親が選択するもの(伊豆諸島青ヶ島、広島県豊田郡豊浜村豊島)

分住式——隠居分家達成後、父親と母親が長

男家と次男家というように、別々になるもの（長崎島五島列島、鹿児島県口永良部島・山口県平郡島など）〔竹田 1969：77～8〕

今浦の場合、過去の実態を窺い知るに足る伝承がほとんどないため、確実なことは云えないが、諸般の事情を総合すると、この分類に従えば、おそらく「単式不完全隠居分家」ということになるものと考えられる。そして、竹田自身も昭和38年（1963）に今浦を訪ねたが確証が得られぬまま、やはり一応、「単式不完全隠居分家」の範疇に入れている。〔竹田 1965：145〕

なお、先の事例④の隠居と⑤の分家の場合と同様な関連が、事例④の隠居と⑤の分家、及び事例⑥の隠居と⑦の分家、の場合にもみられる。

ところで、今浦では普通、インキョといえは分家のことで、「あそこはウチのインキョだ」などと云う。それは、おそらく志摩地方で一般にみられる用法かと思うが、インキョが文字通りの隠居をさして使われるのは、むしろ二義的である。このことは、分家と隠居との深い結びつき、即ち、前述の「隠居分家」が本来の分家のかたちであったことを示唆していよう。とくに今浦では、昭和30年代半ばまで、本家と分家をそれぞれホンヤ・インキョと呼び、これが集落を地域的に二分する二つのグループに分れて、産土神、浦神社の「神祭」では神事や直会を別々に行っていた、という極めて興味ふかい事実がある——今日では簡易化し、両者はすべて一緒にやっている。（神事以外でのホンヤ・インキョの区別はほとんどない）。⁵⁾ ホンヤと呼ばれるグループは集落のほぼ真中を流れる小川の東側の家々で、西側がインキョである。

実際には、両者の戸数のバランスをとるために東側と西側で多少の出入があつて、境界はそれほど厳密ではないが、これはこの二分とともに、全体を5つの地域に区分した組分けとも関連している（5組の中の一組が半分ずつホンヤ

とインキョに所属する）。このように今浦のホンヤ・インキョは、本家・分家に対応する呼称として若干の家格差を含みながら、主に地域的の二分を意味する言葉なのである。「神祭」では、それが専ら儀礼上の演出方式として機能しているのだが、注5)で触れた岡本は、寺や神社、墓地（埋め墓と詣り墓をもつ両墓制）、農耕儀礼、などと関連づけて、川の東が〈清らかな〉範域・西が〈ケガれた〉範域であることを示唆している。いずれにしろ、ホンヤとインキョの格差は、こうした儀礼的地位の違いを表章しており、系譜のない社会経済的な優劣を、それほど意味するようには思われない。ただ、それがどうして地域に結びついたのかについては、上述の岡本の指摘だけでは不十分であろう。この点を、試みに先に参照した明治初年の『名寄帳』で検討してみると、54戸のうち田畑1町歩以上をもつ15戸は1戸を除き、すべて東側にあり、しかも系譜的にも本家筋にあたるから、東をホンヤとするのも故なしとしないわけである。今浦集落は本来、東側にあって、次第に西側に屋敷地をもとめ、インキョ（分家）を出していった、という形跡が窺われるように思う——事実、明治以降の分家にはそうしたものが多い。但し、ホンヤとインキョの経済的格差は、現在ほとんどないし、かつても比較的小さかったとみられる。なお、本・分家間の家格差の小さいことは、今浦の集落内婚率が57.3%（1990年5月現在、今浦在住の全夫婦124組について調査）とかなり高いことから、傍証されよう——集落内婚が多ければ、当然、親族関係のネットワークが複雑になり、単系（父系）的な意識、同族的な指向がでにくいからである。

3. これから隠居制はどうか

戦後の昭和22年（1947）に、前年に制定された新憲法第24条に基づいて、民法の親族篇・相続篇が根本的に改正され、いわゆる「家」制度が廃止になり、したがって法律上（戸籍法）の「隠居」もなくなったのだが、実態としての隠居までなくなったわけではない。志摩地方

は、先の竹田の「隠居分家」の分布にもあるように、隠居慣行がひろくみられるのだが、戦後、それがとくに全国的に知られるようになったのは、昭和30年代に国府（阿児町）の隠居制の実態を調査し公刊した我妻東策（東京農大）の『嫁の天国』によってである。〔我妻 1959〕これが世間の注目を集めたのは、祖父・父・子の三世代夫婦が同一屋敷地内の別棟に分住し、しかもそれぞれが耕地をもち、農業経営も別々である「三世代隠居（隠居農場）制」であるからで、嫁姑の緊張から解放された「嫁の天国」として喧伝されたのである。

最近では、社会の高齢化に伴って、再び「老人の天国」などとジャーナリズムでとりあげられているが、この国府の隠居制の成立については、いくつかの説がある。その中では、我妻が「嫁の天国」の現代的意義を過大評価するのあまり、国府の「隠居分家」システムを一般化しすぎている、と批判した筑紫の説明が当を得ているように思う。〔筑紫 1961〕筑紫によると、国府では、古代政治都市の條里制の名残りである、計画的に地割りされた均等で、しかも広くゆたかな屋敷地を、すべての家もっていて、この希有な条件が上述のような恵まれた「隠居分家」制をもたらした、というのである。たしかに、志摩地方でこのような条件を備えた集落は他にはまず見あらず、リアス式海岸に山地がせまっているのも、隣家と軒を接する狭い屋敷地や零細な耕地だけが目につく、といった集落が多い。今浦などは、まだ条件がよい方で、屋敷地にはほとんどゆとりはないが、耕地は上述の積極的な開墾の成果もあって、周辺の諸集落よりかなり多く、近年では板敷浦の一部埋立も行われ屋敷の移転もみられる。いずれにしても、国府の場合を直ちに志摩に一般化するのは避けなくては行けないが、参照すべき事柄もあるのであって、例えば、注3）で触れた家長権譲渡の問題がそうである。

即ち、国府では隠居の際、隠居（父）は本屋（ホンヤ）を継ぐ相続人（長男）夫婦以外の子女をつれて、同一屋敷地の隠居屋へ移る。そして

相続人はホンヤの家長になるのだが、家産の所有権はそのまま隠居の名義であり、家産の売買などの決定権も隠居がもっている。また、ムラの集会など公的行事にはホンヤの長男がイエを代表して出席するが、重要な問題の決定では経験と見識の深いインキョの意見を聞いてから出席する。このように、ホンヤの家長権にはインキョの代理、という枠を脱し切れない面がある。〔落合 1990：55〕この国府の情況は、注3）で金美栄が今浦について分析していることと全く同じであり、国府でもインキョは表面的な家長権しか譲っておらず、実質的な家長権はまだ保持しているのである。この点からすれば、おそらく今浦でもホンヤ（長男）の地下におけるイエの代表権は、インキョ（父）の代理とみてよいのかもしれない。

ところで、国府の最近の情況について、地元のリダーで前記の報告論文をまとめた落合一之は、たいへん興味ふかい事実を紹介している。それによると、国府の集落内婚は昭和60年代にはほとんど皆無となり、また阿児町内や志摩郡内からの入婚も減少し、通婚圏が県内・県外へと広がる傾向が顕著であるという。これは「嫁の天国」とされる国府でも、農業への将来展望がもてない農家よりも、できれば次三男の公務員やサラリーマンに嫁ぎたいという、娘たちの都市型指向の反映に他ならない。これは男子でも同様で、多くの若者は隠居が元気なうちに、名古屋・大阪など県外に職場を求めて転出してサラリーマンとなり、そこで知り合った女性と結婚するのである。昭和63年に、このように県外で結婚した国府の若者9人のうち3人は後に帰郷して地元で勤務しているが、6人は戻っていない。そのうち2人は次男だが、長男4人の両親たちは隠居するのを延ばし、ホンヤで農業（米・イチゴ）や海苔の生産に従事して、息子たちの帰るのを待っている、というのである。〔落合 1990：72〕

これは「老人の天国」などと喜んでばかりいられない、重要な問題を含んでいると云わねばならない。実は今浦でも情況は同様であって、

問題の背景も基本的には同じである。今浦の集落内婚率は、たしかに上述のように 57.3% とかなり高く、そして 50 歳代以上の妻のほとんどは今浦出身なのだが、40 歳代・30 歳代となると今浦出身は 3 割しかおらず、20 歳代では、なんと 8 人のうち 1 人しかいない、という状況なのである。〔東 1992〕

ただ今浦が国府と違うのは、先にも考察したように、インキョ（父）が農漁業に携わっている一方で、ホンヤ（長男）がサラリーマンとして勤めに出ており、この点では「隠居分家」の機能にさほど支障がない、ということである——もちろん、隠居の高齢化がすすむにつれて、矛盾が大きくなるのは否めないが。国府では、インキョ（父）もホンヤ（長男）も同じ伝統的生業に従事することが、上述の背景・状況から、かえってネックになっている、とみることもできるだろう。

ところで今浦の生業構造が伝統的な農漁業から、今日のカキ養殖を主とする近代的形態に転換したのは、ちょうど高度経済成長期がはじまる昭和 30 年代後半で、いまでは地場産業として確固たるものになっているが、その端緒は戦前の昭和初期に遡る。それまでの「地カキ」採取から、昭和 2 年（1927）に沖縄県人某氏によって養殖技術が導入され、大阪の某氏を中心に地元有志が「日米カキ」という会社組織を作ったのである。その後、昭和 8 年（1933）に東京の某氏による「共栄会社」が、より本格的に営業を始めて戦時を経過し、結局、これは戦後の昭和 28 年まで続いた。その間に漁業法の改正（昭和 22 年、1947）による漁業権の改革などもあり、昭和 25 年ごろから地元漁民でカキ養殖を始める者が増え、昭和 38 年（1963）には 71 戸が 650 台の養殖イカダをもつまでになったわけである。〔鳥羽市史編さん室 1991：603～4、立柳 1992〕なお、養殖漁業権は漁業協同組合が管理しているが、この漁協は今浦だけでなく、麻生ノ浦の対岸の本浦集落との共同組織であって、この二集落は藩政期から明治以降

も今日まで、ずっと「浦村」として一体的な関係にあるのである——伝統的なボラ桶漁も両者が共同で行っていたが、伊勢湾の汚染でボラが廻遊しなくなり、昭和 45 年（1970）に終えんした。今浦は漁業よりも農業に、本浦は農業よりも漁業に、それぞれ比重があるので、浦村漁協の加入戸 108 のうち今浦は 25 戸（96 戸の約 4 分ノ 1）、本浦が 83 戸（155 戸の過半数）であるが、現在、養殖イカダの総数 1,250 台、年間の水揚げ高約 10 億円、1 戸あたりの平均収入が 1,000 万円であって、正にかけがえのない地場産業になっている。いずれにしろ、今浦がかなりの耕地を有して伝統的な農業を維持する一方で、ボラ漁からカキ養殖へと漁業経営の近代化をはかったことが、社会構造にも少なからぬ影響を及ぼしたことは確かである。農漁業以外では、民宿・ペンション経営（7 戸）、キャンプ場経営（2 戸）、養豚（1 戸）、鉄工所（1 戸）、自動車整備（1 戸）、ガソリン販売（1 戸）、大工（1 戸）、舟大工（1 戸）など、さまざまな自営の生業（家業）がみられるが、これらは農・漁業を副業にしている場合がほとんどで、父と息子で分担したり、共同経営したり、というようにいろいろである。もちろん、先に指摘した如く、息子が外に勤めに出る例がずっと多いのだが、このような家業の多様化＝複合化が家族・世帯の構造に微妙に影響していることは推察に難くない。なお、これらの新しい家業のうちで最も目をひく民宿・ペンション・キャンプ場経営は、云うまでもなく、観光リゾート開発と直接むすびつき、とくに昭和 48 年（1973）に鳥羽から賢島までの「パールロード」が開通した頃から、急速にのびてきた業種である。観光地としての立地条件に恵まれた地帯だけに、行政当局（県・市）も積極的に観光施策をすすめているが、カキ養殖との利害のズレ・対立もあって、この業種の今後はやや難しい面がある。

さて、先に家長権の譲渡について国府と今浦の状況を考察したが、家長権と表裏一体なのが主婦権である。高齢化社会といっても、女性の

平均寿命(余命)が高く、隠居制との関連では、嫁姑の関係がやはり問題になるから、主婦権についても検討しておかなくてはならない。因みに、今浦の1990年2月末現在の「住民基本台帳」(住民票)による分析では、65歳以上の「老年人口率」は17.0%とかなり高いが、男だけでは12.4%、女では21.6%と、やはり人口高齢化は女性において著しい。なお、この65歳以上の親族のいる「高年齢者世帯」の全世帯に占める割合、「高年齢者世帯」率は57.3%に達し、鳥羽市全体の数値35.0%にくらべて、極めて高い。〔清水 1992〕これらのことは、隠居制の家族・世帯構成上の基盤を人口学的に示唆しているといえよう。

ところで主婦権との関連で、さきに引用した落合一之は、国府の嫁について次のように書いている。

「一定の見習い期間後は主婦権が譲られ、隠居は完全に隠居し干渉の生活に入る。こうして嫁は本屋の実質的な主婦となり、その地位と責任にともなう権限をもつことになる。殊に衣類・食糧の管理などは一切が主婦の権限にまかされ、主人の男性はいかに亭主関白でも勝手には出来ないとも云われる程である。嫁が主婦として本屋の財布を握り、好きな物を食膳に乗せ、衣類を調整し、労働・休息・就寝を若い本屋のやり方で生活設計が出来ようになり、気分的にも安定し、生活のやり甲斐が持たれていくのである。いわゆるこれが“嫁の天国”といわれる所以であろう。」

そして、このような経済的独立、生産労働の自立、別棟別居し、本屋・隠居いずれもが付かず離れぬ関係が保たれる、といった点に国府の隠居分家制の長所がある、と強調しているのである。〔落合 1990: 61~2〕たしかに、この通りだとすれば、国府では嫁と姑の関係が大方うまくいっている、ということになるが〔落合 1990: 63〕、⁶⁾ 今浦ではどうであろうか。これも先に注3)で引用した金美栄は、主婦権の内容について家事・農業・信仰・経済の諸側面から

考察を試み、今浦の姑と嫁のいる54世帯にアンケート調査を実施している(回収できたのは34世帯)。〔金 1992〕

その結果をみると、炊事・洗濯・掃除のいずれも嫁だけでなく、姑が単独または嫁と一緒にやるが、買物は専ら嫁がやっている。これに対して農仕事はほとんど姑が舅と一緒にやり、嫁は少ししかしていない。また、佛壇・神棚の管理や墓参り、エビスさま・山の神など屋敷神との関わりは姑も嫁も同じ程度である。他方、経済すなわち、家計、財布を握っているのは、買物の場合と同様に、嫁である。

要するに、今浦における嫁姑の関係では、「財布からの隠居はとうに済んだのに、田圃からの引退はいつになるかわからない」という姑たちの言葉が象徴するように、ある意味で嫁に有利な状況がみられるのである。このように、今浦では主婦権譲渡をめぐる嫁と姑の間に意識にズレがあり、嫁姑関係に問題がないわけではないのである。国府と今浦の生業構造の違いが、両者の主婦権・嫁姑関係に何らかの相異をもたらしている、と考えてもよいのかもしれない。いずれにしてもこうした問題も、隠居制がこれからどうなるか、についての示唆を含んでいると思う。

注

- 1) 昭和42年(1967)に、麻生ノ浦の奥の入江、板敷浦の一部埋立が始まり、46年(1971)に完成すると、そこへ家を建てて移転するものが増え、いまでは15戸になっている。移転は、ほとんど集落内でのそれである。
- 2) ただ、〈祭祀長老制〉の「宮座」における場合のように、「イエ隠居」していても、産土神の村落祭祀では最長老が年番神主=当家として実質的な権限をもつから、そうした宗教的役割を果たすまでは「ムラ隠居」してはいない、と云うべきであろう。〔高橋 1978〕この点からすると、「イエ隠居」と「ムラ隠居」は、一応、別のレベルで考えておかなくてはならないわけである。なお、この場合、「ムラ隠居」については、その概念・内容をもっと理念的にきちんとする必要がある。例えば、ムラの総会へ

の出席や重要事項決定への参与、寺社への寄付・祭礼責の分担、道普清その他の公的労役負担、などの権利義務から退くことを「ムラ隠居」とすると、これには一戸前としてのイエの認知と一人前としての労働力の判定という両面がある。実際には、この二つが複合しているのだが、切りはなされることもあるし、どちらを重視するかで変差がみられよう。

- 3) 金美栄によると、今浦において家長権譲渡の対象となりうる条件を備えている——父親が健在であり、譲ってもらった息子がいる——40世帯について、村（地下）における代表権を調べたら、すべて息子の方にあったという。そして、このいわば父が「ムラ隠居」している40世帯について、さらに父と子の年齢と職業を調べ、且、家長権の内容（家屋・田畑の名義、財産処分権、親戚訪問、香典の名義）を検討している。その結果、父親がかなり高齢で伝統的な生業に従事し、他方、息子は会社員などさまざまな職業の勤人であること、そして家産の名義はほとんどが父親、財産処分権もほぼ同様だが、逆に親戚訪問と香典の名義は息子の方がずっと多いことが判ったという。これらのことから、今浦では家長権が実質的な家長権と、表面的な家長権とに分けられ、まず後者から譲渡される、とみなすことができる、としている。〔金 1992〕このような理解に立つなら、今浦の現情は、実質的な家長権を保持して、まだ「イエ隠居」しないでいる父親が、表面的な家長権とともに、地下でのイエの代表権を息子に譲って「ムラ隠居」している、ということになるわけである。こういう形態が高度経済成長期以降だけのことなのか、あるいはもっと以前からもあったのか、という問題についても考えてみなくてはならないが、当面はその立入った考察は困難であろう。ただ、今浦では、15～30歳が青年団（25歳までが普通団員、それ以上が特別団員）、31～35歳が消防団であって、25歳を過ぎれば結婚し、地下総会にもイエを代表して出席する資格もつようになるので、父と息子（長男）のイエにおける家長権の割り振りが上述のようであっても、何ら不都合ではなく、こうしたことはずっと以前からあったとも考えられる。この問題は「年齢階梯制」の存在形態とも関わる点もあるので、今後、さらに考えてみたいと思う。なお、鳥羽湾の離島、菅島の地下は217戸

が10組に分れ、各組の「組頭」（組長）は毎年、その年に「嫁をもらった者」が選出されていた——いまは、20代から30代の者を選ばれる。

この場合も今浦と同様に、父と息子の家長権の割り振りがあるのではないか、と思われるが、詳しいことはわからない。〔林 1991：92〕

- 4) 例えば、〔川島 1957〕などで知られるように、志摩の「寝屋婚・つまどい婚」は結婚初期にかなり一般的にみられる習俗であった。いまでは、ほとんど崩れてしまったが、答志島では「寝屋子制度」として、無形民俗文化財に指定され存続している〔鳥羽市史編さん室 1991：1130〕。
- 5) 「神祭」については、前述の共同調査報告論文において、岡本雅博が〈村落祭祀の双分制〉という視点から分析しているので参照されたい。〔岡本 1992〕
- 6) 評論家の秋山ちえ子は、昭和39年（1964）に国府をはじめて訪れ、三世代隠居制における明るい嫁姑関係のルポタージュを書き、その後、昭和52年（1977）に再訪、さらに平成2年（1990）にも訪ねて、いわば簡単な追跡調査を試みている。いずれも短いエッセイで、これらをまとめた「嫁と姑の天国」という文章のそれぞれのサブタイトルが、〈新しい家族関係の村〉・〈村は何も変わっていない〉・〈ゆらぐことのない暮らし方〉となっているのでも判るように、落合の見方とほとんど同じである。〔秋山 1990〕しかしながら、落合にしる、秋山にしる、こうした見方は先の我妻東策の場合と同様に、私にはどうも楽観的すぎるように思われる。

参考文献

- 秋山ちえ子 1990『十年目の訪問』文芸春秋社
 東 秀子 1992『通過儀礼——厄落しとカネツケゴ』、〔高橋統一ほか、1992、所収〕
 林 研三 1991『西南日本民俗社会の構造——家族親族慣行を中心として』、『札幌法學』2巻2号
 川島武宣 1957「志摩漁村の寝屋婚・つまどい婚について」〔川島『イデオロギーとしての家族制度』所収〕
 金 美栄 1992「家族の居住形態と隠居観の変化」、〔高橋統一ほか 1992、所収〕
 落合一之 1990「隠居制の里——三重県阿児町国府地区」、日本農業研究所『農村の配偶者問題——むら語る（第3輯）』所収

志摩・今浦の隠居制覚書

- 岡本雅博 1992「今浦の祭祀構造——神祭の双分制」,〔高橋統一ほか 1992, 所収〕
- 清水浩昭 1992「今浦の人口と世帯」,〔高橋統一ほか 1992, 所収〕
- 立柳 聡 1992「生業構造からみた今浦の変化」,〔高橋統一ほか 1992, 所収〕
- 高橋統一ほか 1992「志摩の文化伝統とその変容——鳥羽市今浦の社会人類学的調査」,『東洋大学大学院紀要』(社会学研究科) 第28集
- 高橋統一 1978『宮座の構造と変化——祭祀長老制の社会人類学的研究』未来社
- 竹田 旦 1965「族制慣行の特徴——隠居慣行の変異とその系統について」,和歌森太郎編『志摩の民俗』吉川弘文館, 所収(竹田 1969, に「隠居慣行の変移とその系統」として再録)
- 竹田 旦 1969『〈家〉をめぐる民俗慣行』弘文堂
- 鳥羽市史編さん室 1991『鳥羽市史』(下)
- 筑紫申真 1961「国府の隠居分家制度について」,『三重史学』No. 4
- 我妻東策 1959『嫁の天国』未来社